

優秀作品賞

「健康に生きるための自己責任。」

三浦 美千子さん

今から十六年前、冬の寒い日に、母方の祖母がすい臓がんで他界した。祖母は母の実母ではない。母は四人兄弟の長女だが、彼女だけ母親が違うのだ。祖父の最初の妻、つまり母の実母は、昔人としては自立心旺盛。厳格で亭主関白な祖父とはソリが合わず、離婚した。その後、再婚したのが先の祖母。彼女は三人の子宝に恵まれたが、実子と区別することなく、「お姉ちゃん、お姉ちゃん」と、たっぷりの愛情で母に接してくれたのだそうだ。祖母は、ハイカラでおきやんで、とても可愛らしい女性だった。華奢な身体に反して、いつも元気で、病に伏すなど想像すらしたことがなかった。そんな祖母が体調不良を訴え、病院で検診を受けたときには、すでに余命三か月を切っていた。本人への告知はしないことに決め、叔父叔母や従妹たちと、代わる代わるお見舞いに出向き、お喋り好きの祖母が寂しがらないよう努めた。とりわけ、母の献身ぶりには目を見張るものがあった。祖母の足の爪を切ってあげたり、少しでも気持ち悪そうなら、身体をさすったり、タオルで拭いてあげたり、心から祖母を愛しているのだな、と感動と感心を覚えたものである。そんな母の身に変化が起きたのは、祖母の余命が一か月を切った頃だった。母の右胸にがんが見つかったのだ。腫瘍の大きさからいって、なるべく早い手術が必要とされたが、母は祖母の死に目に立ち会いたい一心で、それを先延ばしにしていた。頑なな母に、医師から、「これ以上は待てません。」と最後通告がくだり、ついに手術が実施された。ここから、数週間入院となるが、母は祖母の死に目に立ち会う望みを捨ててはいなかった。手術の翌日、祖母の容態が急変、あっけなくこの世を去ってしまった。父は、慎重にその事実を母に伝えた。母を慰めようと、病室を覗いた私の目に飛び込んだのは、背中を震わせながらむせび泣く、母のか弱い後ろ姿だった。何もできずにドアを閉め、私は病院の待合室でコーヒーを飲んだ。祖母も母も、人間ドックを受診していなかった。たられれば話をして意味はないが、もし、彼らが定期的に健診を受けていたなら、もっと違う結末を迎えられたの

かもしれない。あの日から、母は定期健診を欠かしたことはない。その健診で昨年、母の左胸にがんが見つかった。早期発見のおかげで、手術も簡単に済み、経過もいたって順調。退院後、早い時期から旅行も楽しんでいる。十六年前の悲しい出来事が、奇しくも、今回、母の命を救ってくれたのだ。健康は、当たり前、そして平等に、私たちにもたらされるわけではない。一人ひとり、自分の身は自分で守るしかない。これは自己責任だ。そして、その手段として人間ドックがある。この事を肝に銘じ、父も私も、もちろん母も、毎年、病院に足を運んでいる。